

第

一

編

植

村

清

二

植村清二（うえむら せいじ）

明治三十四年大阪市に生れる

大正十四年東京帝国大学文学部卒業

新潟大学名誉教授

著書「万里の長城」「神武天皇」「諸葛孔明」

「教養としての中国史」「歴史と文芸の間」

第一章 明治維新と西洋文明の摂取

一 明治維新と開国の国是

慶応三年（一八六七年）十月、徳川慶喜は、政權を朝廷に奉還し、ここに鎌倉幕府の創立以来七百年に近い、武家政治は終焉を告げた。その十二月には、公家と薩摩・長州の兩藩を中心とする新政府が組織せられて、徳川氏の勢力は一掃され、これに對する抵抗は、翌明治元年（一八六八年）一月に、鳥羽・伏見の戦で撃破された。ついで三月に慶喜が江戸城を致して降伏するに及んで、明治政府の權威は確立するに至った。

元來徳川幕府が倒壊するに至った原因は、内外にわたっていろいろあるが、これに最も強い影響を与えたものは、尊王攘夷のスローガンであった。そして尊王の主張は、国学の研究の勃興や、水戸学の学風の伸張によって、徐ろに浸潤してきたものであるが、攘夷の議論は、たとえ二百余年の鎖国の因襲に根ざすところがあったにしても、近くペリーが、強大な武力を背景として開国を要求し、幕府がこれに屈服したことに基づくことは、否むことができない。いわゆる幕末の志士の中には、積極的に航海遠略を説く者もあったが、それは極めて少数であつて、大多数は鎖国攘夷の論者であつた。そして彼等はこれを強く主張することによって、諸外国と和親通商の条約を締結した幕府の立場を困難ならしめ、その倒壊を促進しようとしたのである。

しかし彼等が幕府を倒した後に、明治の新政府の中心となって、現実の政治に直面すると、彼等はたちまちそれまで声高く叫んだ攘夷の主張を抛棄して、もとの幕府の取った開国の方針に転換せざるを得なかった。実をいえば、倒幕の中心勢力であった薩摩藩にしても、長州藩にしても、前者はイギリス艦隊の鹿児島襲撃（文久三年、一八六三年）により、後者はイギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国の艦隊の下関攻撃（元治元年、一八六四年）によって、手痛い打撃を受け、攘夷の不可能なことは、充分に自覚して、ただ従来への行き掛り上、これを主張したに止まるのであるから、この転換も、彼等自身に取っては、むしろ当然であったかも知れない。

いずれにしても明治政府はその成立と共に外国に対する鎖国攘夷を一擲して、開国和親を国是とした。明治元年三月には、明治天皇は紫宸殿に御して、有名な五ヶ条の御誓文を告知されている。その第五条には、実に知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

とある。

この御誓文は、越前の由利公正（三岡八郎）が起案し、土佐の福岡孝弟が加筆したといい、また更に長州の木戸孝允が修正したともいう。由利公正は肥後の横井小楠に師事したから、この文章にもその影響が見られるという説もある。しかし起草の事情如何に拘わらず、これが新日本の開国進取の大方針を何よりも明らかに示していることは、争うことができない。

明治四年（一八七一年）に廃藩置県が行われて、封建制度は崩壊した。この年七月、太政官の左院は、西洋文明の摂取について次のように建議している。

「(前略) 今日欧州トノ御交際ニ於ル、譬ヘバ無識者ノ有識者ニ交ルガ如ク彼レニ及バザルモノ多トス、然ルニ今無識ヲ恥テ有識ニ交ラザルトキハ畢生其知ヲ得ベカラズ、夫レ欧州ノ文明ト称スルヤ、内治郡県ノ制ニテ、人民一致シ、諸事規則アリテ綱ヲ舉レバ目張ルト云ル如ク、民法・邑法・商法・刑法・訴訟法ヲ始トシテ、租税・學撰・兵制・統計・運輸ノ諸規則ヨリ、病院・貧院・幼院ノ設ケニ至ルマデ一ツモ精密ナラザルハナシ、是ヲ以テ人才彙出、国富ミ兵強ク、且其各国同等ヲ以テ交リ得ル者ハ、畢竟權力均シキヲ得レバナリ、今皇國ノ治績ヲ顧ルニ右諸件總テ欧州ノ如ク釐正ニ至ラザレバ、名ハ並立ト称スト雖モ、其實ナシト謂フベシ、故ニ本院決議ノ要旨ニ於テハ、彼ニ及バザル所以ノ者ヲ反省シ、其制度文物ヨリ一切ノ庶務ニ至ルマデ、其善ナル者ノ我民情ニ慚フテ治躰ニ裨益アル者ハ、之ヲ折衷採用シ、以テ並立ノ実効ヲ收メントス、(下略)」

そこにはもはや無意味な負け惜しみも強がりもなく、卒直に自國の後進性を自覺して、これを改革するために、全面的に優秀な西洋文明を採用しようとする意圖が認められる。しかもこれと共に、その改革によって、弱少な日本を、列國と並立する自主獨立の地位に進めたいという、熱烈な願望も窺われるのである。

二 福沢諭吉の事業

この時期に當って、新政府を指導して、一代の人心を啓発したのは、實に福沢諭吉であつた。福沢は人の知るところ、豊前中津の奥平藩の下士の出身であるが、若くして大坂の緒方洪庵の門に入って蘭學を學び、更に江戸において英學を獨習し、早くから外國の事情に通じていた。万延元年(一八六〇年)に、幕府は安政條約批准のために、



福沢諭吉（文久二年撮影）

福沢は慶応三年に幕府が軍艦受け取りのために、委員をアメリカに派遣したのに随行して、再度渡米している）これが福沢の鋭敏な頭脳に、鮮明な印象と明確な知識とを与えたことはいうまでもない。帰朝後慶応二年（一八六六年）に公けにした「西洋事情」（初篇三冊、外篇三冊は明治元年に、二篇は明治二年に出版された）は、実にその結果であって、日本の人民は、たとえアウトラインだけでも、西洋の近代文明の实体を、ここにはじめて知ることができたのである。この書がいかに歓迎されたかは、その発売部数が、二十万乃至二十五万に上ったということによって知ることができる。読書力の水準の低い当時にあつては、これは実に驚異的な数字といわなければならぬ。そして天下の人心は、この書によって、その方向を示された。福沢自身

「一人これを語れば、万人これに応じ、朝に野に苟も西洋の文明を談じて、開国の必要を説く者は、一部の西洋事情を座右に置かざるはなし。西洋事情は恰も無鳥里の蝙蝠、無学社会の指南にして、維新政府の新政令も、

アメリカに使節を派遣したが、その際警護の名義で軍艦咸臨丸を渡航させた。福沢はこの時軍艦奉行木村摂津守（喜穀・芥舟）に請うて、その従者となり、はじめてアメリカの土地を踏んで、その実情を知った。更に翌文久元年（一八六一年）幕府が開港延期の談判のために、ヨーロッパに竹内下野守や松平石見守を派遣した際に、またその随行を命ぜられ、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガルの六カ国を巡回した。（さらに

或は此小冊子より生じたるものある可し」

と自負している。

福沢はヨーロッパから帰朝すると、鉄砲洲の奥平家の中屋敷（現在の聖路加病院の所在地内）に居を移し、ここに塾を開いて、英学を教授した。英学の学習を希望する者は、青年壯年を問わず、翕然としてここに集まった。しかし間もなく鉄砲洲一帯は、外国人の居留地となり、奥平家の中屋敷も、取り払われることとなったために、慶応三年の暮には、芝新錢座の有馬屋敷に土地を買い入れ、塾舎を新築して、翌年ここに移転した。これが慶応義塾の起源である。幕末の騒乱のために、幕府の開成校も廃せられ、江戸の洋学者も離散して、洋学も中絶の姿であった時に、慶応義塾のみは毫も動くことなく、上野に拠る彰義隊を攻撃する砲声が耳を打つ間に、福沢が塾生にウエーランドの經濟書を講読したというのは、あまりにも有名な逸話である。

こうして福沢は、そのはじめ翻譯方として、幕府の祿を食んでいたが、維新と共にその俸祿を辞して、一平民となった。明治政府も、またその建設に当って、新知識を必要としたから、しばしばこれを招いたが、福沢は固く辞して、官途に就かなかった。明治三年、彼は三田に土地を求め、翌年慶応義塾をここに移して、その面目を一新した。新政府の学制の、まだ定まらないこの時期にあっては、義塾は実に日本の新しい学問の中心であった。英学を学ぼうとする者は、各地から義塾に集まり、ここで養成せられた英学者は、また各地に設立された学校の教師となって四方に赴いた。明治初年以來官公私立の学校には、塾の出身者が多く任用されている。明治五年に文部省は、学制を公布した。これは主としてアメリカ人モーレー（D. Murray）の立案に基づくものであるが、その招聘は、

福沢の勧めによるものである。文部大輔田中不二麿は、文部行政に関しては、福沢の意見に聞くことが多かったのだ、当時「文部省は竹橋に在り、文部卿は三田に在り」という言葉さえ行われたという。

しかも福沢は、教育家として、育英の事業に力を尽すと共に、評論家として、著作にその精力を傾けた。「世界国尽」(明治二年)「学問のすゝめ」(明治五年)などは、いずれもその産物である。「世界国尽」は、平易な韻文で、文字通り世界の事情を紹介したもので、民衆の間に広く愛誦せられ、「学問のすすめ」は、福沢の生平の持論である自主独立と進取の精神を主張したものであって、当時の知識人に、多大の影響を与えたものである。実に福沢論吉は、当時の文明開化の風潮を代表した人物であるということができよう。

三 外人教師の招聘

こうして新日本の社会は、進んで西洋文明を吸収摂取することとなったが、それにはおよそ三つの方法があった。その第一は外人教師後というお雇い教師の招聘である。すなわち各種の學術技芸にわたって、これに長ずる者を招いて、日本人に教授させようとしたのである。そしてそれは開国そのものが、外国の軍事的圧迫に基づいただけに、先ず軍事国防の方面において行なわれた。既に旧幕府時代に、慶応二年(一八六六年)フランスから、大尉シヤノアヌ(Ch. J. Chanoiné)以下十数名の将校及び下士官を招いて、横浜に陸軍伝習所を開いて、三兵(歩、騎、砲)の運用を教授させたのが、恐らくこの種のものの最初であろう。伝習所は後に江戸に移され、幕府瓦解の時にシヤノアヌ等は解雇されて事は已んだが、将校の中でブリュネ(J. Brunet)等の数名が、榎本武揚等と共に函館戦争

に従ったことは、有名な話である。またデュ・ブスケ (G. Du Bousquet) が、後に明治政府に用いられて、元老院の傭となり、礼服や勲章の制定に参与したことも、人の知るところである。

明治になっても、そのはじめ兵部省では、やはりフランス軍人が、教練を教えた。それはドイツ・フランス戦役で、フランスが敗れてからも、なお且然りであった。ベルトー (Berteaux) ミニエ (Mynuet) 等は、それである。有名なメッケル (K. W. J. Meckel, 1842-1906) が招聘されて、ドイツ兵学を教授するようになったのは、是るかに後の明治十八年 (一八八五年) のことである。

海軍もほぼ同様である。幕府は早く安政二年 (一八五五年) に、長崎に海軍伝習所を開き、オランダからベルス・ライケン (P. Rijken) 後にカッテンダイク (W. J. C. H. van Kattendijke) 等の海軍士官を招いて、教習を行なったが、これは安政六年に廃せられた。慶応二年 (一八六六年) にはフランスの海軍士官バリー (Barry) を招いて、横浜港碇泊の富士山艦で、海軍兵学の教習を開いたことがあるが、後にこれをイギリスに委託したために、翌年イギリスの海軍士官が来朝して、教授に当たっている。これは維新以後にも引き続き、兵学寮・海軍兵学校の外国教官の主なもの、イギリスの軍人であった。その中には、後のポーツマスの司令長官となったダグラス (Douglas) 提督などもある。

軍事と共に最も早く外人を招聘して、教授に当らせたのは、江戸時代中期から、すでに蘭学によって開発された医学であった。安政四年 (一八五七年) オランダの軍医ポンペ・ファン・メルデルフォールト (Pompe van Meerdervoort, 1829-1908) は、招かれて長崎に來り、幕府は松本良順に命じて、直接ポンペから教えを受けさせた。こ

それが西洋医学の正式の講習の嚆矢である。良順に伴われた司馬凌海が、ボンベの講義を通訳して、諸生に授けたのは、この時のことである。ボンベの後任としては、文久三年（一八六二年）ボードウィン（A. F. Bauduin）が来朝し、さらに慶応二年（一八六六年）に、マンスフェルト（C. G. van Mansvelt）が、長崎精得館の教師となった。はじめて医学の本科及び予科の課目を立てたのは彼である。彼は維新後肥後藩に招聘され、熊本に病院及び医学校を創立している。

戊辰の戦役には、イギリス人ウィリス（W. Willis）が、官軍の負傷者を診療して功があった。そのために彼は大学東校の教師となつて勢力があつたが、後に政府はフルベッキ（G. H. F. Verbeck）の建言に基づいて、イギリス医学をドイツ医学に切り替えることとなり、明治四年（一八七一年）には、ドイツから Hoffman（J. Hoffmann）及びミューレル（L. Müller）が来朝した。有名なベルツ（E. Bälz）が来朝して、東京医学校で、生理学・病理学・内科学の講義を担当するようになったのは、更に遅れて明治九年（一八七六年）のことである。

医学に関連して、物理学・化学等の自然科学も、またヨーロッパ人教師に負う所が多かつた。ハラタマ（H. W. Gratama）は、オランダの陸軍医官であつたが、慶応二年二月に、長崎の分離（析）窮理所の教官として来朝し、五月から開講した。しかし長崎は土地が西辺に僻しているために、大量の実験器具、薬品などを携えて、江戸の開成所に移つた。ところが間もなく戊辰の役が起つたために、彼は大坂に移り、明治二年に開かれた舎密局^{セイ}で教授した。舎密局は明治三年に理学所と名を改め、更に大坂開成学校となつた。ハラタマのこゝで行なつた講義は、その門弟三崎嘯輔（尚之）によって訳されて、「理化新説」（未完）（明治三年）として公けにされている。彼の在任の期

間は短かったが、はじめて日本に組織的に化学的知識を輸入した者として、その功は没することができない。ハ
ラタマに代って、明治三年の末に大坂理化学所の講師となったのは、ドイツ人リッテル(H. Ritter)であって、明治
五年九月まで、物理学及び化学の講義を行なった。この講義を市川(平岡)盛三郎の訳したものが、すなわち「理
化日記」(明治三年—五年)である。なおイギリス人ダイヴァース(E. Divers)が、工学寮工学校(のち工部大学)
に招聘されたのは、明治六年(一八七三年)であり、同じくアトキンソン(R. W. Atkinson)が開成学校に招聘
されたのはその翌年であって、この時期から日本の化学教育は、本格的となったのである。

純粋な学問から、進んで実用的な技術面では、外人教師はさらに貢献するところが多かった。イギリス人ダイ
ヤー(H. Dyer)は、ダイヴァースと同年来朝して、工学寮工学校創立の衝に当り、新日本の工学教育の基礎を定
めた。ヘアートン(W. E. Ayton)は、電気工学を担当して、長足の進歩をさせた。造家学科(建築学科)の主
任としては、明治十年にコンドル(J. Conder)が招聘せられ、洋風建築の祖となった。実務ではオランダ人のフ
ァン・ドールン(C. J. van Doorn)及びデ・レイケ(J. De Rijke)の二人は、明治六年に来朝して、河川の改
修及び港湾の築港等の土木事業に功があった。カーギル(B. B. Cargill)は、はじめイギリスの銀行員として来朝
したが、明治五年以来日本政府に雇傭されて、鉄道の建設に従事した。東京・横浜間の鉄道開通は、彼の力による
ところが多い。カーギルの後には、オルドリッチ(A. S. Aldrich)がこれを承けて、久しきに亘って功績があっ
た。採鉱では早く明治四年にフランス人コワニー(F. Coigney)が鉱山寮に招聘されたが、明治六年には、ドイ
ツ人ネッター(C. Netto)が、工部省に招聘された。ネッターは、後に東京大学理学部の教師となった。「涅氏治

金学」は、その著書である。

なおやや異なった方面ではあるが、イタリア人キヨソネ (E. Chiossone) は、明治八年に来朝して、印刷局に出仕し、紙幣などの銅版印刷に、画期的な功績があった。ラグーザ (V. Ragusa) 及びフォンタネジ (A. Fontanesi) は、共に明治九年に来朝し、工部美術学校で彫刻や洋画を教えた。殊にフォンタネジは優秀な画家であって、在職の期間は短かったが、日本の美術界に及ぼした影響は大きかった。

こうして中央政府ばかりでなく、各藩（後には各県）にも、外国人が招聘されて、各種の任務に当った。明治五年には、その総数は、三六九人、明治八年には五二七人の多きに達している。これらの外国人の中には、勿論間々素質の劣悪な者もあって、大学南校でさえ、「無宿者の收容所」と酷評する者があったという。しかしその多くの人々は、誠実且有能であって、よくその職責を果たした。西欧の文明が、急速に日本に伝播し、普及したことについては、彼等の功績が多であったことを、何人も認めないわけには行かない。

なお政府以外に、民間の企業その他に招かれた外国人も、漸次その数を増している。また自ら進んでキリスト教の伝道のために、日本に来朝し、宣教以外に學術を伝達した者も少なくない。長老教会の伝道者として、早く安政六年に来朝して、神奈川や横浜に施療院を開き、また「和英語林集成」（一八六七年初版）を著わした有名なヘブーン (J. C. Hepburn) などは、その代表的人物である。万延元年に来朝したイーストレーク (W. C. Eastlake) も、その子孫まで引き続いて英語教育に功績があつて有名である。そのほか新聞事業に従事して、日本人を啓発したブリנקリー (F. Brinkley) やブラック (J. R. Black) も、またその名を逸することができない。

四 留學生の派遣

外国からの學者・技術者を招聘して、その技芸を學ぶと同時に、日本人自身が海外に赴いて、直接新知識を攝取することが、要請されるようになった。元來徳川幕府が、寛永年間に國を鎖して以來、日本人が海外に渡航することとは、國禁であつた。(幕府が海外渡航の禁令を廢したのは、慶応二年のことである)従つてたまたま中浜万次郎(ジョン・万次郎)や、浜田彦藏(ジョセフ・ヒコ)のように、漂流してアメリカで教育を受けた者を別にすれば、正式に出國した者は絶無であつた。

それが万延年間の遣米使節らによつてその文明の高度に進歩した状態を、實地に經驗すると、これを吸収することの急務は、当局者にとつて、痛切に感ぜられた。そこで徳川慶喜や松平慶永等によつて、幕府でいわゆる文久の改革が行われると、海外に留學生を派遣することは、その一つの課題となつた。文久二年六月、榎本釜次郎(武揚)、内田恒次郎、赤松大三郎(則良)、田口俊平、伊東玄伯(方成)、林研海(紀)、津田真一郎(真道)、西周助(周)等が、オランダに派遣されたのは、すなわちその最初の試みである。榎本等は海軍伝習所關係であつて、田等は洋書調所關係である。これが近代の外国留學生の嚆矢である。当時ボンベが帰國して、彼等を世話したことは、極めて幸であつた。榎本等は慶応二年に、オランダで建造した開陽丸に搭乗して帰國し、西等は、なお留まつて學問に従事した。維新の際に、榎本が艦隊の一部を率いて函館に拠つて官軍と戦い、その帰順の後に、明治政府に登庸されて、台閣にまで列したことは、周知の事實である。また西周や津田真道が、明治初年の啓蒙期に、明六

社の同人として活動したことも、人のよく知るところである。

慶応二年に、幕府は福沢諭吉の提議によって、更に十四名の留学生を、イギリスに派遣した。その中で川路太郎（聖護・寛堂）、中村敬輔（正直・敬宇）の二人は取締であって、成瀬錠五郎、外山捨八（正一・山）、箕作奎吾（寧）、林桃三郎（董）、伊東貫之助、億川一郎、福沢英之助、箕作大六（菊池大麓）、市川森三郎、杉徳三郎、岩佐源二、安井新八郎の十二人は生徒であった。この時林桃三郎は十六歳、箕作大六は、わずかに十二歳の少年であった。彼等の在英中、幕府は瓦解したが、幸に学資金が保留されたために、彼等は留学を続け、明治になって帰朝した。中村敬宇・箕作奎吾等が、明治初年の洋学の泰斗であったことは、いうまでもない。外山ちゅう山は帝国大学総長として、最高学府の運営に任じ、菊池大麓は数学者として大名を馳せた。彼等の留学が、日本の文運に貢献するとの多かったことを知るべきである。

ここに注意しなければならないのは、幕府が第一回の留学生を、オランダに派遣した翌年に、長州藩がイギリスに留学生を派遣したことである。長州藩は当時攘夷論の中心であったが、しかしさきには吉田松陰が、ペリーの再度の来航の時に、これに便乗して、アメリカへ渡航しようとして失敗したことがあり、後に永井雅楽は、航海遠略論を唱えて、一時藩論を定めたのであるから、このことのあったのも、怪しむべきことではないかも知れない。文久三年、伊藤俊輔（博文）、志道聞多（井上馨かおる）、野村弥吉（井上勝まさる）、山尾庸三、遠藤謹助の五人は、横浜から密航して、ロンドンに赴いた。そして伊藤と志道聞多の二人は四国艦隊の長州攻撃を調停するために、急いで帰国したが、他の三人は留まって学問を修得し、明治になって帰国して、それぞれ要務に就いた。伊藤、井上が明治の元

點として、政治・經濟の最高指導者であったことは、いうまでもない。井上勝の鐵道における、山尾庸三の工業における、遠藤謹助の造幣における、みな創業の功を荷なうものである。

薩摩藩もまたイギリス艦隊の鹿児島來襲以後、海外の新知識を学ぶ必要を感じ、五代才助（友厚）等の建議に基づいて、慶応元年（一八六五年）留学生を密かにイギリスに派遣した。それは町田民部（久成）、畠山丈之助（義成）、磯永充輔、市來勘十郎、中村宗見、田中静州、鮫島誠蔵（尚信）、寺島藤助（宗則）、松木弘庵、森金之丞（有礼）等の十六人であった。別に新納刑部、五代才助等は、ヨーロッパ視察の名義で、これと同行した。これらの留学生も、また後に新日本の建設に寄与した者が多い。特に寺島宗則は外交關係に、森有礼は文部行政に、その功が大きかった。

開国を政策とした幕府はもとより、攘夷を主張した薩摩や長州が、こうした情勢であったから、明治維新になって、新政府が成立すると、海外留学生の派遣は、頓に盛んになった。明治三年には海外留学規則を定め、留学生を官選と民選とに区別して、渡航免状を下附することとなった。いま一々の留学生について記述することは、その余裕もないし、またその必要もないが、試みに注意すべきものの一、二を挙げると、明治二年には西郷慎吾（従道）、山県狂介（有朋）がイギリスに赴いている。この二人は実に明治の陸海軍の事実上の建設者というべきである。明治三年に、田尻稻次郎が、アメリカに法学研究のために留学したが、彼は財政学の鼻祖といふべき学者である。明治四年十一月に、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允等は条約改正を目的として、アメリカ及びヨーロッパに渡航したが、その際これと同行して、華士族の子弟実に五十四人が、海外に留学した。その中でも山川健次郎は、アメリ

カで物理学を修め、後に東京帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任して、日本の教育に大なる貢献をした。金子堅太郎は、同じくアメリカで法学を学び、後に伊藤博文の下で、憲法の制定に力を尽し、二度台閣に列した。栗野慎一郎は法学を学び、各国の大、公使を歴任して、外務大臣となった。最も年少であった団琢磨は、鉱山学を専攻し、帰朝後三井組に入り、日本の財界の重鎮となった。この年また中江篤介（兆民）が、フランスに留学したが、彼がその地で哲学を修め、帰朝後フランスの民権思想を鼓吹したことは、よく知られていることである。

特に注意すべきは、従来最も伝統を重んじて、いわば保守主義の中心であった皇室が、その旧套を一新して、皇族を海外に留学させたことである。すなわち明治三年には、華頂宮（博経親王）は、アメリカに、東伏見宮（嘉彰親王）は、イギリスに、伏見宮（後に北白川宮能久親王）は、ロシアに留学された。いずれも軍事の研究が目的であったが、同時にヨーロッパの貴族社会の、社交礼節を学ぶためであったことは、いうまでもない。

皇室に倣って、もとの公家及び大名、すなわち新たに華族と名づけられた階級も、また統々とその子弟を欧米に送った。明治五年現在で、外国に滞在中の著名な人々を挙げると、西園寺公望、蜂須賀茂韶、上杉茂憲、鍋島直大、黒田長知、前田利同等がある。

勿論これらの人々の中には、「東京新繁昌記」に

「一個はロンドンの業平となり、一個はパリスの助六となりつつ、必竟一道も貫かず、国に帰りて役立つ貴公子は甚だ少し」

と揶揄されたような者も、かなりあったことであろう。しかしその多くは、ヨーロッパ、アメリカの文明を吸収し

て、これを日本の上流社会に伝達するのに、功があったのである。

最も驚くべきことは、この時期に、早くも女子留学生の派遣が行われたことである。岩倉具視等の欧米遣使と同船した留学生の中には、吉益亮子、上田悌子、山川捨松、永井繁子、津田梅子の、五人の少女が含まれている。彼女等は当時北海道開拓使長官であった黒田清隆の建議によってアメリカに派遣されたもので、最も年長であった吉益亮子が十五歳、最も年少であった津田梅子に至っては、わずかに八歳であった。その点で、彼女等の留学は、単なる試み、あるいは一つのエピソードに過ぎなかったともいえるが、しかしまた封建の旧弊を打破して、明治時代における女性の地位の向上の先駆としての使命を、ある程度まで果したということもできる。彼女等の多くは、後に家庭の中に埋没したが、津田梅子が英学塾を創立して、女性の英語教育に雄々しい旗幟を翻えたことは、最も記憶すべき事実である。

このように外国教師または技師の招聘、留学生の派遣は、ヨーロッパの新文明を、日本に移植するために、その寄与するところが多大であったが、しかもそれにはおのずから限界があった。まず財政面から見て、いわゆる御雇外国人の給料は、極めて高額であった。一例を挙げると、明治二年に大学南校の教頭であったフルベッキの月給は、六百円であり、同四年に左院雇であったデュ・ブスケ、同六年に文部省学監であったモーレー、同年に工学寮工学校教頭であったダイヤー等の月給も、同じく六百円であり、明治三年に造幣首長であったキンドル (Th. W. Kinder) の月給に至っては、実に千四十五円という高額であった。これを明治七年に、工部大輔であった山尾庸三の月俸が四百円であり、参議で内務卿を兼ねた大久保利通の月俸が、それぞれ五百円であり、右大臣であった岩

倉具視の月俸が六百円であり、太政大臣であった三条実美の月俸が八百円であったことを考え合せると、彼等がいかに給与の面で優遇され、それだけ政府の人件費の負担が大きかったことが理解されよう。

留学生についても、その経費は甚だ多かった。明治六年の調査によると、この年ヨーロッパ、アメリカ及び清国に留学する者は、文部省三百二十一人、大蔵省二十三人、工部省十二人、宮内省二人、北海道開拓使二十三人、軍医寮一人、その他三百八十五人であって、その経費は、実に三十五万五千六百弗に上っている。私費留学生をこれに加えれば、その数字は、更に巨額となる。もとより巨額の支出ではあっても、新文明の輸入について、その得る所が、失なう所よりも多大であったことは、言を俟たないけれども、外人の招聘にしても、留学生の派遣にしても、西洋文明を急速に普及させる点から言えば、まだ若干靴を隔てて痒きを搔くの憾みがあるのを免かれなかった。この欠点はいかにして補なうべきであるか。それは最新の知識を盛ったヨーロッパの書籍を大量に輸入して、一般に普及させることが、最も便宜でまた効果のある方法でなければならない。

五 外国圖書の輸入

そもそも江戸時代の中期、將軍吉宗の時から、耶穌教に関するもの以外の外国書籍の輸入は、よほど取締が寛やかになった。有名な「解体新書」の原本、すなわち「ターヘル・アナトミア」が、前野良沢や杉田玄白等の手に入つたのは、オランダ人から、オランダ通詞を経由したものである。勿論その入手はすこぶる困難であったが、漸く幕末に近づくと、蘭学を修める者が多くなり、それに伴って蘭書の需要が高まったために、それまで日蘭貿易品の

中で、協荷物として輸入された書籍は、年と共に注文が多くなっている。オランダの書店から、書籍の目録が送られて来ている事実さえある。そして長崎や江戸で、蘭書を活字で複製することも行われ、各藩でも、蘭書の木版翻刻を行なっているところがある。安政条約が締結されると、書籍はすでに協荷物でなく、主要輸入商品の一つとなり、江戸では長崎屋が主としてその販売に当たった。こうして輸入された書籍は、多くは幕府及び各藩の学校等の所蔵に帰したが、個人の手に入ったものも、必らずしも少なくない。幕府所蔵の図書は、維新後、内閣文庫、帝国図書館（国会図書館の前身）、皇室博物館（国立博物館の前身）、東京大学、葵文庫等に分散し、その中大正の震災や昭和の戦災で失われたものも、数多いが、近年国会図書館（上野）で、発見されたものだけで、三千三百九十八冊に達する。以てその総数の一斑を知ることができよう。その他各藩の藩校などにも、また相当の蔵書があったのであって、いまこれを全部に亘って精査することは困難であるが、全体としては、かなりの多数に上ったと思われる。しかし安政の開国以来、蘭学の学習が英学の学習に一変すると共に、その書籍の輸入も、また全たく新しいルートによって、行われることとなった。そしてその先導となった者は、また福沢諭吉であった。福沢は万延元年のアメリカ渡航の際に、同行した中浜万次郎と共に、ウェブスターの辞書を、一冊ずつ買って帰朝したが、これがこの辞書の日本に輸入されたはじめであるという。「福翁自伝」によると、これを手に入れた悦びは、天地間無上の宝を得たるが如くであったとある。

しかしこの時は、福沢は木村摂津守の従者という身分であって、旅費も潤沢でなく、欲望はあっても、多くの書物を購入う余裕はなかった。しかし文久二年にヨーロッパに赴いた時には、幕府から四百両の手当金を支給され、

繰替拝借金も相当に受け、奥平藩からも助成を得たから、前回に比すると、福沢の財囊は、かなり豊かであった。

この年福沢がロンドンから、故郷中津の先輩島津祐太郎に贈った書簡の一節に

「右に付先づ洋法を採用するには、実地の探索は勿論に候得とも、迎も老人にて僅の時日に尽しがたく、後は書籍取入れ候より外手段無之、既に当府ロンドンにて、英書も大分相調候得共、尚又和蘭え参候はば、十分に買取候積に御座候。江戸にて頂戴仕候御手当金は残らず書物相調へ、玩物一品も持ち帰らざる覚悟に御座候」とある。当時の事情と共に、福沢の壮烈な気魄が、紙面に溢れている。

しかしそれにも拘わらず、この時の書物の蒐集は、それほど大量ではなかったらしい。あるいは公用のために、時間が乏しかったためであろうか。「慶応義塾紀事」によると

「文久二年英国開版の物理書、地理書、學術韻府等の書に併せて經濟書一冊を得たり。即ち『チャンプル』氏教育読本中經濟の一小冊子にして、当時は日本國中稀有の珍書なりき。」

とある。これらの書籍の所在は、いま全く不明である。

福沢が最も大量に書籍を買入れたのは、実に慶応三年に、軍艦受取りのために、再度アメリカに赴いた時である。この時はすでに鉄砲洲の塾も、次第に発展して、学生の数も増加したから、その教授のために、書籍の購入は、最も必要であり、その費用も自費のほかに、仙台藩、紀州藩などの資金も委託されたからである。福沢の日記に、ニューヨークで、アップルトン (Appleton) 書店と交渉のあったことが見えているが、これらは主な取引であったのであろう。ところが福沢は上司であった小野友五郎と意見が衝突したために、その荷物は身分不相応というこ

とで、差押えられ、数カ月の後に解除されたが、それは塾が鉄砲洲から新錢座へ移ってからであった。三輪光五郎の談によると、茶箱のような大きい箱が八つか九つで、その中には一杯本が詰っていたという。これは他藩に委託された分も、含まれていたからである。この中で福沢自身の書籍には、「福沢氏図書記」の朱印が捺された。何といても塾の教授用を主としたから、同一の書籍を数部購ったものも、かなりあったようである。そしてこれらの書籍は、塾生に貸与して、その利用に便宜を与え、その制度は、明治三十一年まで存続したのである。

この時福沢の将来した書籍は、ほぼ今もお慶応義塾の図書館に所蔵されている。これらは「福沢氏所蔵書籍之印」という印記がある。語学・数学・自然科学・歴史の各科目にわたって、辞書・入門書・概説の類が多くて専門書が乏しいのは、学生の教科書としての性質上、已むを得ないことである。

福沢以外にも、留学生で、その学習し愛読した書籍を、帰朝と共に日本に齎したもの、勿論数多くあったわけである。榎本武揚が、五稜廓で、その勢が漸く窮まった時に、オランダから携え帰った海律全書を、攻囲軍の司令官黒田清隆に贈ったというのは、有名な逸話である。このような書籍は、他にも多く伝えられたであろう。ただいまその一々について精査することは、編者の力の及ばないところである。ただ津田真道の将来本が慶応義塾に所蔵されて、その中にモンテスキューの「法の精神」やコントの「実証哲学原理」（オランダ訳）が含まれていることを注意したい。

実に外人教師の招聘にも、留学生の派遣にも、大きい制約があるとすれば、ヨーロッパ、アメリカの進歩した知識及び技術を、急速に日本に導入するためには、福沢がその書簡で言うように、各種の書籍の輸入は、一般の人々

に取って、最も手近で、また最も便宜な方法であった。否外人が招かれて、学生に教授する場合にも、留学生が帰朝して、その知識を伝達する場合にも、書籍は欠くことのできない必要品であった。しかも幕末から明治初年にかけては、外国書籍の輸入は、極めて一部の外国商人（ハルトリー商会など）が、これを取り扱ったに過ぎないために、到底当時の国内の、旺盛な需要を満たすに足りなかった。一代の先覚福沢は、これを解決するために、在外中に書籍を蒐集したように、日本において書籍及びこれに関連して、薬品や各種の実験・医療の器具を、海外から輸入する事業を、自ら発起した。ただ福沢自身は、教育と言論とに重大な任務があつて、その非凡の精力を以てしても、更に貿易事業に直接従事することは、極めて困難であつた。そこで福沢は、この新文明輸入の大事業を、その分身に委ねて遂行させることとなつた。福沢の分身とは何人ぞ。早矢仕有的はすなわちその人である。